

## パーソンフッドとスティグマ : 自己論とカテゴリー化論のいくつかの課題

その他のタイトル	Personhood and Stigma : Some Issues in Understanding the Self and Categorization in Everyday Life
著者	中河 伸俊
雑誌名	情報研究 : 関西大学総合情報学部紀要
巻	54
ページ	3-26
発行年	2022-01-30
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00026079">http://doi.org/10.32286/00026079</a>

# パーソンフッドとスティグマ — 自己論とカテゴリー化論のいくつかの課題

中河 伸俊\*

## 要 旨

本稿の目的は、アーヴィング・ゴフマンの『スティグマ』を参照しながら、カテゴリー化という観点に軸足を置いて、日常のやりとり（相互行為）の中での参加者の自己（self）の立ち現われ方をめぐるいくつかの課題を検討することである。そのためにまず、そうした作業の方法論上の前提について述べたあと、ゴフマンの自己呈示論とサックスの成員カテゴリー化論を踏み台にしながら、そこに欠けていた、個別固有なものとなみなされているパーソナルなアイデンティティをめぐる考察を『スティグマ』から抽出し、それがもたらすいくつかの課題を検討した。その帰結として、役割—パースン複合体という新たな概念を提示し、それを補助線に、ジェンダー論の分野での論争点である性別のオムニレリヴァンスとパラレルな形でゴフマンが主張する、スティグマのオムニレリヴァンスについて若干の試論を提示した。

キーワード：自我と自己、成員カテゴリー化装置、役割—パースン複合体、役割距離、スティグマ、オムニレリヴァンス

## Personhood and Stigma: Some Issues in Understanding the Self and Categorization in Everyday Life

Nobutoshi NAKAGAWA

### Abstract

This paper revisits Erving Goffman's *Stigma* to appreciate his discussions on the concept of personal identity. Such discussions are neither present in his theory of the self in *The Presentation of Self in Everyday Life* nor in Harvey Sacks' ethnomethodological formulation of the membership categorization device. This study expands on Goffman's insights on the everyday self, describing the idea of the role-person complex and reexamining the adequacy of Goffman's omnirelevance of stigma.

---

\*関西大学名誉教授

Keywords: ego and self, membership categorization device, role-person complex, role distance, stigma, omnirelevance

## 1. 目的と方法論上の前提

本稿は、筆者の「自己」の社会的構築をめぐる考察（中河 2010）の、若干の「その後」の展開を示すものである。と同時に、ネット経由の最終講義（中河 2021）の事前配布資料を補筆修正にしたおそらく筆者最後の学術的論述、言い換えれば、同系統の探究に関心を寄せる研究者仲間への「言いっぱなし」的な申し送り事項の提示でもある。

自己の構築は、人と人の相互行為を可能にする社会秩序とはどのようなものなのかという、社会学というディシプリン（分野）の出発点に置かれるべき問いに関わる、きわめて重要な論題だと筆者は考える。

社会秩序を、部分（個々の相互行為）を統合する役目をはたす、フォーマルで抽象的な規則によってつなぎ合われた地位と役割のシステムという「理念的実在」に担保されたものとして思い描く従来の社会学的見解（パーソンズの社会システムの理論がその典型）には、社会理論としてだけでなく、経験的研究の指針としても大きな欠陥があると筆者は考える。1970年代に、パーソンズ流の機能主義が社会学の主流のパラダイムとしての座を失ってからすでに半世紀近くたったが、しかし、それと同種の社会秩序観は明示的に（そのうちもっとも洗練されたものがGiddens 1984=2015）、あるいは暗黙裡に（こちらのほうがしばしば自覚がないから始末に悪い）、数多くの社会学的探求や議論の前提として使われ続けている。筆者の社会構築主義をめぐる年来の議論や提案（たとえば中河 2004; 2005）は、思い返すなら、エスノメソドロジーの方法論的教訓に学びつつ（Francis and Hester 2004=2014）、社会学的探求の指針としてより健全な社会秩序についての考え方とその探求の方法をめぐる模索でもあった。

そうしたあるべき社会学（もしくは社会科学）的探求は、早くにウィンチが指摘したとおり（Winch 1958=1977）、その研究対象となる「社会的なもの」が例外なく、行為主体（human agency）による概念の使用を伴う「規則に従った」活動を通じて組織化されたものである以上、一般に自然科学的な探究法として理念化されているものとは異なる方法的基準を指針にする必要がある<sup>1)</sup>。そうした社会学的探求を具体化するための進路としては、ロールズが説くとお

---

1) ウィトゲンシュタインの所説を援用したウィンチの以下の指摘は、エスノメソドロジスト以外の社会学者には、真剣に参照されることが少なかった。「社会制度の理解とは、その制度にあずかる人々の行動に規則性を観察し、それを一般化の形で表現することにある、というのがミルの見解であった。さて、もし社会学者（広い意味での）の立場が、論理的性格においておおよそ自然科学者のそれに対応しているのなら、次のことが成り立たねばならない。つまり、社会学者がそれによって二つの場合で同じことが生じた、または同じ行為がなされた、と判断する概念や基準は、社会学的研究が従っている諸規則との関連において理解されなければならないのである。だが、ここで一つの困難が生じる。というのは、自然科学者の場合には我々はただ一組の規則、つまり科学者の研究それ自体を規定してい

(Rawls 2003), ゴフマンの状況内での自己呈示についての考察 (Goffman 1959=1974) と、ガーフィンケルの状況内での了解可能性 (intelligibility) についての考察 (Garfinkel 1967) を組み合わせるのがもっとも生産的であるだろう<sup>2)</sup>。これは、ある意味で、これもロールズがいうとおり、デュルケミアンの社会学の現代的な展開だということもできる (Rawls 2004 中河 2019b)<sup>3)</sup>。本稿での、ゴフマンの「自己論」をめぐる若干の考察は、以上のような文脈を念頭に置きながら行われる。

なお、ウィンチにならって上のように、概念の使用を伴う人びとの活動こそが社会(科)学が研究すべき「社会的事実」なのだと言えど、いわゆる言語論的転回がかまびすしく云々された時期があったにもかかわらず(筆者がたずさわった社会問題への構築主義アプローチもその一環だった)、いまなおそれが「行為者の主観的な意味づけを重視せよ」という指摘だと誤解され、〈主観的な行為者の動機や意味づけ = ミクロ vs. 客観的なシステムや社会構造 = マクロ〉(さらには、〈主観的な意味や経験を捕捉するインタビュー調査 vs. 包括的な客観的事実を捕捉する計量調査〉という二分法の図式に回収されてしまう公算は決して小さくはない。ウェーバーの行為の主観的な意味づけについての所説の難点については、ウィンチのきわめて明快な指摘がある (Winch 1958=1977 邦訳 pp.55-63)。そもそも概念(言語)の使用自体がきわめて社会的な事柄なのであり、そして、それに目を向けないなら私たちは、いかなる「社会的事実」も

---

る規則を取り扱えばいいのに対して、社会学者が研究している対象とは、彼の研究そのものと同じく、一つの人間の活動であり、したがって、規則に従って営まれているからである。そして、こうした活動について何を「同じ行為」とみなすべきかを決定するのは、社会学者の研究を規定する規則であるよりは、むしろこれらの「活動が従っている」規則なのである。」(Winch 1958=1977 邦訳 p.107)

- 2) 言い換えれば、詳説の紙幅はないが、理解社会学や相互行為(作用)論、現象学的社会学、解釈学的社会学等々のラベルをつけたさまざまな試みは、この二つのソースから十分に学ばないかぎり、経験的探求の方針として満足できるものにはならないだろうというのが、筆者の判断である。さらにいえば、ロールズが指摘するとおり、この組み合わせは、ゴフマンにガーフィンケルをはめ込むかたちだと、たとえばギデンズが手際よく行ったように従来の社会学の方法論上のバタンに回収されてしまうことになるから (Giddens 1984=2015)、ガーフィンケルの概念枠組みにゴフマンをはめ込むという手順がとられなければならない。ただし、ロールズは、とりわけ『フレーム分析』(Goffman 1974) などにおけるゴフマンを過小評価しすぎなので (Rawls 2003)、ゴフマンの「いいところ」をもっと救い出していかなければいけないとも、筆者は思うのだが (中河 2015; 2016)。
- 3) デュルケミアンの学的系譜には、ざっくりとした言い方をすれば、①方法論的個人主義や各種の還元主義をとらず、sui generisな社会的事実が「ある」ということを前提にする、②その探究プロジェクトは歴史学と人類学の知見を踏まえ、また、それらに開かれるといった特徴があるといえる。ただしもちろん、一世以上前の人であるデュルケムの所説を、現代の私たちが金科玉条のように丸ごと受け入れてよいわけではない。『自殺論』のある部分に典型的な、ポジティヴィストの色彩の強い「よくないデュルケム」(この部分が前掲のウィンチや、サックスの批判の対象になっている)と、『宗教生活の原初形態』のとくに儀礼論に代表されるような、人びとの具体的な実践に照準を合わせた「よいデュルケム」とが弁別できる。ロールズは、後者を、ゴフマンやガーフィンケルの非パーソニアン的な洞察(どちらもパーソンズ批判を踏み切り板としてその所説を形成した)の淵源もしくは先達として位置づける。

観察できない<sup>4)</sup>。さらに、主観／客観図式を自明視して議論のリソースにする論者は、客観性という語でいったい何を指そうとしているのかを、たとえばダストンとギャリソンの科学史的な再吟味の作業を念頭に置きながら、自身に問い直してみるべきだろう<sup>5)</sup>。

## 2. 日常生活における自己呈示と成員カテゴリー化分析

十年ほど前に執筆した拙稿(中河 2010)で筆者は、社会学と社会心理学において「わたし」関連の用語が、概念的に未整理なまま、数だけ増え続けて取捨のつかないインフレ状態になっていることを確認したあと、①哲学者の酒井(2005)に依拠して、せめて自我(ego, カントのコギトに始まる)と自己(self)<sup>6)</sup>の混同だけは正そうと提案し<sup>7)</sup>、②古典社会学における自己の取り扱いを、(A)デュルケミアン(=「表象としてのわたし」論)、(B)ミーディアン(「過程としてのわたし」論)、(C)ジンメリアン(=「社会関係の結節点としてのわたし」論)に大別する<sup>8)</sup>というやや大きめの風呂敷を広げた。さらに、それを踏まえて、③ミードのIとMEを説明概念とする社会化=役割取得論から、ゴフマンの「状況に埋めこまれた自己 situated self」論へとという系譜の流れの中で<sup>9)</sup>、現代社会学が、相互作用の中で／を通じてその都度的に達成さ

- 
- 4) ちなみに、本書に多出するウィンチの「哲学的」というキーワードは、そのほとんどを「概念的」という語に置き換えて理解して差し支えない。そして、そうしたタグで名指される作業を、社会学者は、積極的に言語哲学の領域から横領してわが物とすべきだろう。概念分析や成員カテゴリー分析と呼ばれる研究手法(酒井他 2009)は、そうした横領の動きの先がけとして理解できる。
- 5) 客観性という語の科学における歴史を振り返れば、社会的な議論での主観／客観の二分法の皮相性が顕わになる。「客観性は主観性を、核としての自己を恐れる。デカルトが感覚の証拠を度外視することができたのは、彼が思い描いた核となる自己、すなわち思惟实体(res cogitans)に感覚刺激が属していなかったからである。ベーコンは、洞窟のイドラ、すなわち個人の教育と偏愛に由来する知的な欠点は、間違った向きに曲がった木をまっすぐにできるように、適切な対策によって正すことができると信じていた。だがカント以後の主観性には、それを取り除いたり、対抗してバランスをとったりする方法はない。主観性は知識の前提条件、すなわち知る自己そのものなのである。／このことが、客観性が持つ残忍なほどに自己言及的な特徴、すなわち意志に立ち向かう意志、自己にあらがう自己の理由である。これこそが客観性の力を説明する。客観性は、ほかのどんな処方よりも根本的な認識論上の治療法である。なぜなら、客観性が治そうとする病は、知識と誤謬双方の根っこにある、文字通り根本的なものだからである。」(Daston and Galison 2007-2021 邦訳 p.307)
- 6) いうまでもなく、イメージだけでなくさまざまな概念を介在させる後者こそが、社会学の主要な研究課題である。なお、私たちが人間が「自己」を得ることになったのは、ヒトに固有の言語使用能力と、それに先行する鏡像の使用やゲシュタルト構成の認知的操作能力のおかげであるだろう(ヒトのゲシュタルト構成能力については、チンパンジーとヒトの子どもの「お絵描き」の比較研究を参照のこと。→チンパンジーと人間の子どもの描画の比較 <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2014-10-28-0>)
- 7) 船津(2005)やHolstein and Gubrium(1999)のような論者でさえ、両者を混同している。
- 8) 社会学における「わたし」現象へのアプローチには、この三者以外の主要なものとして、パーソンズ(Parsons 1964=1973)に代表される、フロイディアンの所説を援用したものがあるが、私の整理では、これは、基本的には、(超自我概念とミードのMEには多少の類似性があるとはいえ)自己ではなく自我(ego)系統の議論だということになる。
- 9) ただし、シカゴ大学で学んだゴフマンは、当然ミードの議論を自家薬籠中のものにしつつ、同時にロ

れる“状況に埋め込まれた自己 (situated self)”という、社会学ならでの独自の視点を獲得したことを確認した。そして最後に、④そうした進展をさらに進め、経験的探求の精度を高めるものとして、サックスが創始した成員カテゴリー化装置 (membership categorization device=MCD) による分析 (Sacks 1974; Francis and Hester 2004=2014; 前田他 2007)<sup>10)</sup> の大筋を紹介し、その画期性と重要性を指摘した。

その後の十年に、ゴフマンが『行為と演技』(1959=1974) で詳細に考察したような〈状況内で相互行為を通じて、言い換えれば、提示と隠蔽、承認の表示と見て見ぬふり、探索とそのブロック等々を通じて、その都度的にその場で産出される自己<sup>11)</sup> 〉についての筆者の検討には、いくらかの進展があった。その核心的な部分は、ゴフマンが『スティグマの社会学』(Goffman 1963=2001) で提示した、社会的アイデンティティとパーソナル・アイデンティティ、エゴ・アイデンティティという「わたし」のあり方の三つの類型をめぐる洞察に触発されたものである。しかし、そうした進展の中身について述べるまえに、必要最低限の用語の再確認をしておこう。

アイデンティティ (以下適宜 ID と略することもある) とは、「あなたは (あるいは、あの人は) だれ (何者) なのか?」という問いへの答えとして、場面や文脈に応じてわけがわかる (intelligible) かたちで提示することができる“人のカテゴリー” (サックスのタームでいえば

---

イド・ウォーナー経由のデュルケミアンでもあり、また当時のシカゴ学派の知的嗜みに沿ってジンメリアンでもあったという意味で、社会的な自己論の三つの系譜の最強の総合者だったといえる (ちなみに、中河 (2017) の時点では、近年薄井 (2013) が示したゴフマンのジンメリアンの部分についての検証結果がまだ十分に咀嚼できておらず、上のように論じることができなかった)。

- 10) これは伝統的な社会学の役割理論 (ミーディアンと機能主義の二つの系譜があるが) を、社会的カテゴリーの使用をめぐる私たちの日常的な実践に照準を合わせる形で再生し、経験的研究の有力な用具として再生したものだといえる (中河 2005も参照のこと)。ちなみに、サックスのこの発想の萌芽を、その以前の師であるゴフマンの『スティグマ』に見て取ることができる。“In our society, to speak of a woman as one's wife is to place this person in a category of which there can be only one current number, yet a category is nonetheless involved, and she is merely a member of it. Unique, historically entangled features are likely to tint the edges of our relation to this person; still, at the centre is a full array of socially standardized anticipations that we have regarding her conduct and nature as an instance of the category 'wife', for example, that she will look after the house, entertain our friends, and be able to bear children. [...] Thus, whether we interact with strangers or intimates, we will find the finger tips of society have reached bluntly into the contact, even here putting us in our place.” (Goffman 1968 (1963): 70-71) さらにいえば、「集合表象」としての役割は分析的概念にすぎないと論じ、社会的状況における／／での活動の一部としての割り当てやパフォーマンスに目を向ける必要を説いた「役割距離」論文の前半の部分 (Goffman 1961=1974: 85-103) もまた、従来の役割理論から成員カテゴリー化論への架橋となるものとして位置づけることができよう。
- 11) その場がどんな場面であり、その場に参与している人たちは何者であり、そしてその場ではいったい何が行われているのか、言い換えれば、状況と参与者と活動は、それぞれが互いに概念的に支えあう相互反映的 (reflexive) な関係にあり、私たちの社会秩序は、そうした性格をそなえた状況内での活動の相互行為的な組織化を通じて「内側から」達成される、というのが、“状況に埋め込まれた自己”という発想の前提になる社会的な教理である。

membership category) である。あるいはそれを、ある時点において特定の個人が、状況（相互行為の場面）に応じて、自らをその担い手と考え、そう提示しうる人のカテゴリーというふう言い換えてもよい。私たちの社会には数多くの人のカテゴリーがあり（つまり人びとは常識知や専門知に依拠して数多くの人のカテゴリーを使っており）、ミードがその役割取得論で述べたように、私たちは言語を主な媒介とする他者とのやりとりを通じて（あるいは言語教育の用語によるなら言語文化的環境への浸漬 immersion の結果として）、そうした多種多様なカテゴリーをめぐる知識を身につけて使えるようになっている。

そうしたカテゴリーは、それぞれがその述部 (predicates) をなす諸属性（特定のタイプの行動、能力、権利、義務、知識、態度、情動、見かけ等々）と概念的に結びつけられ、また、それは個別バラバラのものではなく、カテゴリー対（{男-女}、{親-子}、{夫-妻}、{友人-友人}、{先生-生徒}、{店のスタッフ-お客}、{上司-部下}……）やカテゴリー集合（家族={父-母-息子-娘-祖父-祖母}、会社の従業員{{(平)社員-係長-課長補佐-部長-専務-社長……}、野球の守備位置={投手-捕手-一塁手-二塁手……}、犯罪事件の関係者{被害者-加害者もしくは被疑者-警官や刑事-目撃者や証人}……）といったかたちで構造化されている。それは、人のカテゴリーであるから、定義上一般的な性格のものであり、そして、それを担う人たちについての知識は、社会についての私たちの知識の中核的な部分を占めている。

ウィリアム・ジェイムズ以来の歴史をもつ多元的自己という語を使って言い古されてきたように、ひとりの個人は同時に数多くのカテゴリーの担い手としての資格を保持しうる（女、弁護士、娘、妹、母、ジャニーズファン、アスレティッククラブの会員、マンション管理組合の会長、立木トラストのメンバー……）。こうしたアイデンティティのカテゴリーは、そのそれぞれが、固有の論理文法にもとづいて使用される。ある種の人のカテゴリーは、基本的には自己申告どおり他者に承認されるが（「自分はスピードマニアだ、フェミニストだ、シヨタコンだ、日ハムファンだ……」）、いっぽうには、一定の社会的な過程や手順を経なければその担い手になる資格を得られない“排他専有的”な人のカテゴリーも数多くある<sup>12)</sup>。従来の（パーソニアンの）社会学における生得帰属的な (ascribed) 地位と達成された (achieved) 地位というじつは不完全な二分法も、そうしたカテゴリーの論理文法を指すものと考えるべきだろう。前者（性別、家族やリネージの中での位置、国籍、エスニシティ、人種、「先天性」の障害等々）は排他専有的であるのみならず、そのように「生まれついて」担い手となるカテゴリーなのであり、その変更はしばしば社会的なイシューになる。帰属的であれ達成的であれ、その ID カテゴリー

12) 相互行為の場面では、参加者は基本的には、その場にいる他者が自己申告する ID を尊重するが（ゴフマンが指摘するとおり、そうしないとやりとりが基盤を失う）、しかし活動の目的に応じて、明示的もしくは暗黙裡に、たがいの ID の確認や裏付けの探索が行われる。identification card に類する身分証明の証や書類は、当然ながら、特定の個人があるカテゴリーの担い手であることの他者による承認を円滑にするために制作され、証明が必要な本人によって携行される。

の排他専有性が高いときにはじめて、アイデンティの虚偽の提示や偽装の余地が生まれ<sup>13)</sup>、またそれが問題視される。

個人が担いえるカテゴリーの出所（制度的な拠りどころ）は多種多様だが、古典的な社会学の教科書に立ち戻って（近年の社会学の入門講義ではあまりこうした区分を教えなくなった）、その出所を関係（relation）と、集団（group）および集合体（collectivity）の二種類に大別しておくことには、一定のメリットがあるだろう。大まかにいって、社会関係（とくに近年の「親密な」と形容されるような類いのそれ）の基軸がカテゴリーペアであるのに対して、「機能分化」が進んだ私たちの社会の集団と集合体（「一家」や公式組織フォーマル・オーガニゼーションから「民族」や国民国家まで）は、境界によって内と外を区分するだけでなく、その内にきわめてしばしば作りつけの複雑なカテゴリー集合をそなえているからだ<sup>14)</sup>。ちなみに、「敵」と「味方」というカテゴリー対はいうまでもなく、社会関係からは生まれず、集団と集合体の文脈においてのみ喚起されうる（利用可能な）概念のペアである。

### 3. 『スティグマ』の三つのアイデンティティ概念

ゴフマンの名著『行為と演技』（Goffman 1959=1974）では、一貫して自己の呈示（presentation of self）が「わたし」現象をめぐるキイ概念だった。しかし、その4年後に出た『スティグマ』（Goffman 1963=2001）では、彼がスティグマと命名した対人的な discrediting（信用失墜）が、相互行為を通じてどのようにしてもたせらるかを体系立てて考察するために、社会的アイデンティティ、パーソナル・アイデンティティ、自我（ego）アイデンティティの三つのID概念が導入されている。すでに芦川（2017）が指摘したとおり、従来のミーディアンの自己論の系譜とゴフマンのそれとを決定的に分かつのは、このうち二番目のパーソナル（個人）IDについての、それまでにほぼ類例のないしかし重要な考察だった<sup>15)</sup>。

社会的アイデンティティとは、前節で述べたような、さまざまなやりとりの場面で参加者がその担い手とみなされる（そのような者として同定される）人のカテゴリーであり、同書ではそれを「社会的カテゴリー」と呼んでいる。そうした人のカテゴリーには、the colored や the

13) これは『スティグマ』だけでなく、ゴフマンの後期の名著『フレーム分析』（Goffman 1974）でも、fabrication frameの問題として、大きな紙幅を割いて論じられるトピックである。

14) このふたつを二軸にとって、四象限でさまざまな社会の「コスモロジー」の比較を試みたメアリー・ダグラスのグリッド／グループ「理論」（Douglas 1970=1983; Spickard 1989）は、大風呂敷にすぎないかもしれないが、それを丸ごと採用することはできないとしても、カテゴリー対の使用が優勢な編成原理である社会（たとえばひと昔前の東アフリカの「国家のない社会」）と、カテゴリー集合の使用が優勢な社会（たとえば民族主義が沸騰中の国民国家）の違いを論理文法に引き寄せて理解するのに、少なくともある程度は有用であるように思われる。

15) ミーディアンの、いわゆるシンボリック相互作用論者の中でも、ストラウスにはパーソナル・アイデンティティについての論及があるが（Strauss 1959=2001）、それは、基本的には精神分析系の社会心理学者エリクソンのアイデンティティ論を援用したものであるようにみえる。



blindやthe drug addictやthe vagrantなどといった、否定的な評価と結びつけられてスティグマ化されたカテゴリーも含まれる。スティグマカテゴリーは多くの場合、デュルケミアンなら集合表象と呼ぶような、ステレオタイプ化されたイメージとイデオロギーを喚起し、利用可能にする。そのため、スティグマカテゴリーやそれと結びつけられる諸属性（成員カテゴリーの述部）は、特定のやりとりの場面において不適切な他のさまざまな情報と同じく（ただししばしばより懸念な）隠蔽の対象になる<sup>16)</sup>。

パーソナル（個人）アイデンティティは、私たちが社会的カテゴリー（もしくは役割）の背後に「いる」と想定する、固有名と、固有の身体的な見かけと、固有のバイオグラフィーと、固有の人格をそなえた個人を指し示す。たとえば、名刺や身分証は、各種の社会的カテゴリーと、姓名や見かけを示す写真を同一フレーム内に表示することによって、その所持者の社会的IDとパーソナルIDをセットで示している。

最後の自我アイデンティティは、エリクソンらという自我アイデンティティ（自我同一性 Erikson 1959=1973）と重なりあう概念である<sup>17)</sup>。この三つのタイプのIDの対比について、ゴフマン自身のことを引いておこう。

この研究では、社会的なアイデンティティとパーソナルなアイデンティティを区別することを試みてきた。このどちらのタイプのアイデンティティも、エリクソンや他の論者が、「自我」アイデンティティもしくは「感じられた」アイデンティティと呼んできたもの、すなわち、個人がそのさまざまな社会的経験の結果として得ることになる自身の状況や自身の持続性や特質（character）についての感覚を括弧に入れた（bracketing）上で比較対照することによって、そのよりよい理解が得られる。

社会的なアイデンティティとパーソナルなアイデンティティは、何よりもまず、そのアイデンティティ〔その人物が何者であるか—中河〕が問題になっている個人についての、他者の関心と定義の一部分なのである。パーソナルなアイデンティティの場合、こうした関心や定義は、人が生まれる前から生まれ、墓に入ったあと、つまりその人が何も感じなくなっても継続する。いっぽう、自我アイデンティティは何よりもまず、そのアイデンティティが問題になっている個人が必然的に感じるはずの、主観的で自省的な（reflexive）事柄なのである。（Goffman 1963=2001: 179-180 ただし訳は中河による）

---

16) スティグマをもたらす属性の隠蔽と開示をめぐるさまざまな戦略的实践が、同書の主要なテーマのひとつである。その意味で、『スティグマ』は、『行為と演技』（Goffman 1959=1974）のパースペクティブを、特殊なケースにあてはめた一種の応用編とみることもできる。

17) ここでegoを使い、『行為と演技』では一貫して自己（self）について論じているところからみて、ゴフマンは哲学の伝統に根ざす自我と自己の違いをわきまえていたようにみえる。ただし、下の引用で、自我IDがリフレクシヴ（自己反省的）な現象だと、おそらくはミードのIとMEを踏まえて指摘する以上、そこにも自我だけでなく自己が大いに介在しているのではないか、という突っ込みの余地は残されている。

#### 4. 役割（社会的カテゴリー）—パーソン複合体と役割距離

少し前にある報告で、『スティグマ』で示された三つのID概念のうち、前の二つのあいだのつながりを考えるために、「役割—パーソン複合体 (role-person complex)」という概念を提案した(中河 2017)<sup>18)</sup>。これは、社会的な状況の中で、人がその場に「いる」特定個人を了解可能な何者かとして思い描くにあたって、利用することができる情報の総体を仮想的に思い描くために作ったタームである。

社会的な活動の場（それが対面的なものであれ<sup>メディア</sup>媒体を介するものであれ）の参加者は、その場にいる自分および他者が何者としてその場にあわせ、したがってお互いがお互いに何を期待することができるのかを曲がりなりにもわかっていなければ（ゴフマン語でいうなら作業上の合意 working consensus が成り立っていないと）、その活動を進めるためのやりとりを行うことができない。したがって、ゴフマンが『行為と演技』の序の冒頭で述べたとおり、私たちは、よく知らない人とやりとりをしなければいけない状況下ではとくに（とはいえ、もちろん知っている人とルーティーン的なやりとりをする場面でもある程度そうなのだが）、社会的IDとパーソナルIDの双方に関わる諸属性や諸特徴をめぐる情報を、さまざまなコミュニケーションのチャンネルを通じて収集し、また自身についてのそうした情報を、明示的にもしくは暗黙裡にやはりさまざまなチャンネルを通じて他者に「呈示」しようと試みる。つまり、相手がどんな人かを知ること、および、自分がどんな人かを知ってもらうことが、程度の差こそあれ（スーパーのレジでの店員とお客のやりとりと、恋愛関係の初期段階にあるカップルの「お出かけ」の際のやりとりとでは、「知りあう」必要性の水準は大きく異なる）、相互行為場面を組織化する

18) 「役割の仮面とその背後の『素顔』のその人、あるいは、ビュフェでの食事で私たちが皿に取る各種の料理のようなものとしての社会的ID（役割）と、それを載せる皿のようなものとしての、不変性もしくは連続性をそなえた実体である個人。こうした対照は、日常的、および学問的（とりわけ心理学的）推論のいずれにおいてもよくみられるものだ。しかしながら、ゴフマン（遑っていえばデュルケミアン）の立場をとるなら、パーソン [ス] ンもまた、役割と選ぶところのない社会的構成物なのである。社会的IDとパーソナルIDの位置関係について、ここではとりあえず三つのことをいっておきたい。第一に、前者のないところに後者はない。言い換えれば、各種の役割カテゴリーとそれを裏づける社会的場面を参照しない形での、パーソンのイメージを構成する作業はありえない。ゴフマンの役割距離のメタファー（Goffman 1961a=1974）が明らかにしたように、パーソナリティ（特定のパーソンがそなえているとされる諸『内面的』属性の総合）は、ある意味で、社会的役割のカテゴリーを参照するという行いの効果の一つなのだ。第二に、以上の理由から、社会的IDとパーソナルIDは切り離してではなく、その都度的に相互反映的に成り立つ“役割—パーソン複合体”として理解されるべきである。[……] 第三に、パーソナルIDの構成は、ゴフマンがアイデンティティ・ベグと呼ぶ、名前（固有名詞）や顔や体つきや声や見かけ等々の個人の弁別と同定に使われる諸要素を核とし、その周囲に『その人』についてのさまざまな情報をくっつけていく形で行われるが、そうした『その人』の構成の作業において材料として決定的に重要な個人史的な情報<sup>バイオグラフィカル</sup>のほとんどが、その人が担う（あるいは担ってきた）社会的IDに関わる事項の列挙によって形作られるという点も再確認しておく必要がある。」(中河 2017 当日配付資料 pp.2-3)

るための前提条件なのだ。

やりとりの性質や局面や流れに応じて<sup>19)</sup>、特定の参加者の役割—パースン複合体に含まれる情報<sup>20)</sup>のうち、ある部分が前景化し、他の部分は後景化する。たとえば、レジでの店員とお客のやりとりはふつう相互のパーソナルIDの厳密な同定抜きに行われるが<sup>21)</sup>、いっぽう、荷物や書留を受け渡しする郵便局の窓口や、大学入学者選抜試験の会場では、顧客や受験生のパーソナルIDの確認は不可欠な手順だ。いわゆる「告る」とかプロポーズするとかの場面で、パーソナルIDとそれを修飾する諸属性を度外視してそうした関係変更の要請を行う人はいないだろう。いっぽう、戦場で殺しあう兵士にとっては、銃口の先にいる相手は何よりもまず「敵兵」であり、そのパーソナルIDとそれに結びつけられる諸属性は多くの場合知り得ないし、知ることとはむしろ不具合でさえあるだろう<sup>22)</sup>。

前景化と後景化は、認識の対象になる人と、その人がいる場、その人が携わっている活動についての利用可能な情報や知識やイメージの総体（役割—パースン複合体）のある部分、ある布置連関に目を向け（志向し）、他の部分、他の布置連関には目を向けずに無関連のもののみならずという、対象化と選択的無関心（selective inattention）の認知的作業を通じて達成される。役割とパースンフード（ある人の個別固有の「その人」としてのありさま）は、他者を何者かとして位置づけ思い描くという、社会的な活動にとって不可欠な同定作業の中で、いわば焦点（もしくは活動の編成原理の表示／リマインダー）として交互的に立ち現われる。「It's nothing personal（これはきみ個人を云々しているわけじゃないんだよ）」という慣用句を上司が部下にいったとしたら、それは当然職場でのフォーマルな役割関係を喚起しようとする試みであるだろう。しかし、そうした言いまわしの流通自体が、じつは、役割関係が前景化した活動の中でも、私たちは同時に、後景化したパースンをめぐる観察や推論をけっこうしばしば行っている

- 
- 19) ここで、ゴフマンの後年の概念、フレームが重要な役割を果たすことになる（Goffman 1986（1974））。
  - 20) そこには、その人がだれでありどんな人であるかについての、直接に観察や推論が可能な属性や特徴だけでなく、過去のやりとりや伝聞から得た知識や、もっともらしい憶測、ステレオタイプのなイメージやイデオロギーまでが含まれる。
  - 21) 店員が胸に姓名を示すネームプレートをつける店が増えてきてはいるが、お客が名前を尋ねられることはまずないし、プレートから確認できるにもかかわらず、お客が店員の名前を呼ぶこともまずないだろう（とはいえ、やりとりを繰り返す中で、顔や姿形や声音などを手がかりに、「いつものあの店員さん」といった水準のパーソナルな同定が行われることはあるだろう）。
  - 22) 一人前の兵士になるための訓練の中には、技術的および体力的なものだけでなく、「敵」が自分たちと同じような「人間」だと認識する回路をあらかじめ塞いで（同一化をカットし相手を純粹に「敵」として対象化して）戦闘行為を臨めるようになることも含まれる（Grossman 1995=2004）。そこでは、本文中でも一言触れたように、その昔サムナーが内集団／外集団と呼んだ社会的カテゴリーの操作、あるいはダグラスのグリッド／グループ分析にいうグループが、決定的な役割を果たす。ちなみに、グリッドが優勢な氏族（もしくは lineage）社会では、外集団のイメージは弱く、したがってこうした近代の国民国家でのそれとは「敵」の作られ方は違ってはいたはずだ。その意味では、いわゆる元寇を、「日本」という内集団的な自意識の出発点（武士の間でのという限定はつくにせよ）とみる一部の歴史家の所説は理解しにくいものではない。

ことを示唆する<sup>23)</sup>。そうした事実を足がかりにしたのが、ゴフマンの有名な「役割距離」についての議論である (Goffman 1961=1974)。

「この気まぐれな行動 [状況内でのルーティーンから外れた行動] が意図的であるかそうでないか、心からのものかかわりだけか、その場にいる人たちに正しく受け取られるかそうでないかといったことに関わらず、そうした行動はその個人とその人の役割とのあいだ、行為と存在のあいだ (between doing and being) に打ちこまれた楔となる。この『実効的に (effectively)』表出された、個人とその役割と思われているものとのはっきりした分離の表出を、役割距離と呼ぶことにする。これは、次のような事態を指し示す、略式のいい回しである。役割距離を表出する個人は、実際にその役割を否定しているのではなく、その役割を受け入れることに、パフォーマーがひとしなみにそれを持つという含みがある、そうしたヴァーチャルな自己 [個人 ID] を否定しているのである。」(同訳書 pp.114-115, ただし訳は中河) この定義は、有名な、メリーゴーランドに変則的な乗り方をする年長の子どものについての観察を参照事例として述べられたものだが、それをより一般化していえば、人がある場面である役割を担ってパフォーマンスをするとき (それ以外に私たちが社会的場面に立ち現れるすべはない)、その役割からいくらか隔たった行ないによって自分が「どんな人間か」を表示しないなら、その人は、まさしくその場での役割が指し示すような特徴をもった人だと推論されがちだということである<sup>24)</sup>。言い換えれば、私たちは、フォーマルな役割関係 (成員カテゴリーのペアやセットを基盤にした) を拠りどころにして組織化された活動の場で、役割に付きものの属性や行ない (成員カテゴリーの述部) に回収されない事柄を、しばしばそれにたずさわっている人の人格 (パーソナリティ) や性格<sup>25)</sup> に帰属させ、その表れとして理解する。役割距離の表出はきわめてしばしば、他

23) 企業内などのいわゆるフォーマルな関係も、親密さがその特徴だといわれるインフォーマル (パーソナル) な関係も、どちらも、社会的カテゴリーを使って達成される役割関係であるという点に変わりはない。専門用語としてのフォーマル (公式) とインフォーマルとは、二分法ではなく、じつは連続的な程度概念であり、後者の方向に向かえば向かうほど、パーソナル ID に帰属されるような諸要素 (名前や見かけや履歴やスタイルや性向や趣味嗜好などのいわゆる「個人情報」に属する諸属性) が、関係の中での活動においてより大きな役回りを担うようになると考えるべきだろう。

24) そうした役割との距離を表出することができる程度は、動作主体 (agency)、ゴフマンの用語でいうところの「プレイヤー」の自由度を反映しており、そしてその自由度がミニマムな「完全収容型施設 (total institution)」においてすら、収容された患者はそのミニマムな自由を行使する。サルトルのいささか中二病に傾斜しているように見える哲学的な自由論 (アンガー・ジュマン!) と比べて、こうした役割距離型のゴフマンの「自由」概念は、きわめて成熟した社会学的なものだと思われる (cf. Rawls 1984)。

25) 心理学やと精神医学における性格という概念の歴史については、渡邊 (2010) に詳しい。ただし、科学的な概念としてそれがいかに失敗していても (「性格の定義は性格心理学者の数だけある」同書 pi), 私たちの日常生活の中で「性格」ということは強い生命力を保っている。それはもちろん、日々のやりとりの中で、既知の他者の行動を説明したり予測したりするにあたって、「あの人はこういう性格の人だから」といった様式の推論作業が、いろいろな意味で「役に立って」いるからである。ウィンチの論述を借りるなら、「そこでいま、Nの行動を観察している人Oを考えてみよう。もしOがNの行動を予測しようと思うなら、彼は、Nがそれによって状況を眺めている諸概念に彼自身精通しなけ

者をそうした理解へと意図的に誘導しようとする行いである<sup>26)</sup>。しかしながら、役割とのパフォーマンスにおける不一致だけでなく、一致（にこりともしない門衛の兵士や子どもに目をやって微笑む母親）もまた、私たちが他者の個人アイデンティティの要素となる諸属性を「発見」する順路なのだという事実もまた忘れるべきではない<sup>27)</sup>。

## 5. パーソンの固有性と一般的なパーソン

前節の“役割—パーソン複合体”は、一定の実体性をそなえた存在である人（パーソン）が、場面や人生の局面ごとに次々と役割の仮面を付け替えるという、従来の考え方（学問的にも常識的にも）への、大胆なオルターナティブの提案だった。このモデルでは、役割の仮面の背後からときおり覗くように見える「ほんとうのその人」も、じつは役割の効果（正確に言えば、役割を何らかの形でリファレントにした「役割の担い手」としてのパフォーマンスの効果）だということになる。しかし、話はそこでは終わらない。

機能主義の役割論は、社会的なやりとりを、機能によって結び付けられた、抽象的な規範の束としての役割のペアやセットの作動として思い描いた。しかしながら、もっともフォーマルな役割関係に基づくやりとりの場合にも、やりとりの相手は、固有の身体および見かけと固有名と固有の履歴（career, もしくはバイオグラフィー）とをそなえた特定の具体的な「その人」として、私たちの前に立ち現れる（メディアを介したやりとりの場合、私たちは、メディアツールの「向こう側」に、そうした諸属性をそなえた「その人」がいると想定する、というかそ

---

ればならないし、またそうすることによって彼は、Nの性格についての彼の知識から、Nがどんな決定をするかをかなりの自信をもって予測できるだろう。しかしながら、Oが予測に使用した諸概念は、たとえNが予測とは異なった決定を行ったとしても、その意義を失うわけではない。もしそのようなことが起こったとしても、それは必ずしもOが予想を誤ったことにはならないのである。なぜなら、決定に関して必要なのは、与えられた一組の『予想』が、一組の異なった結果のどれかに導かれるということだからである。」(Winch1955 =1977 pp.112-113)ということになる。つまり、性格を始めとする日常的推論において予測（予期）に使われるさまざまな概念の役目は、自然科学において予測の基盤となる諸概念とはまったく異なったものなのである。そして、それはそうした文脈内でそれなりに有用なものである。（日本人が「発見」して好んで使ってきた血液型概念にも、じつは同種の有用性があるのかもしれない。）

- 26) もちろん、意図的な役割距離の表出が行われなくとも、私たちは、やりとりの中で、他者の役割の「こうであるべき」と考えられる基準と実際のパフォーマンスのずれをきわめてしばしば読みとり、それをめぐってさまざまな推論をする。これは、ゴフマンの『行為と演技』の主要なモチーフのひとつである。
- 27) 「仮面の向こうにいるその人が見えた」と私たちが感じる時、役割距離や役割一致に目を向けた属性情報の探索と選択を介して、パーソナルIDのゲシュタルト的構成（「あの人はこういう人だ」と形容されるような何かを「存在する」ものとして思い描く作業）の中では、その「人物像」のゲシュタルト的構成が行われている。認知的協和への性向が大いに作動し、それを基盤にして、ゴフマンがいう演出論の水準での、認知的不協和（Festinger 1954=1965）の戦略的利用が可能になるだろう。

う信じる)<sup>28)</sup>。アイドルや政治家の人気や好感度について考えてみれば、それは自明なことである。

その概念の出発点とされるミードの議論を振り返ってみても、役割は人間の一般化の能力によって取得されるものだった(重要な他者から一般化された他者へ!)。役割が一般的な名称と一般的な権利や義務(成員カテゴリー化論でいえば述部)のセットとして概念化されること自体は、それがやりとりにおいて使われる言語(概念)的なりソースと考えるなら、当然のことである。しかしながら、実際のところ、純粹に一般的な役割、たとえば、一般的なコンビニ店員や、一般的な警官、一般的な コンサルタントといったものは、私たちの実生活にはありえないことを忘れてはいけない。たとえば、セブンイレブン高槻天神町一丁目店のパート店員何某や、茨木署鮎川交番詰めの地域部所属巡査何某、土地コンサルティング業の3Sプロパティグループの総括主任何某といったぐあいに、フォーマルな役割は個別具体的な個人に担われるだけでなく、その担い手は、個別具体的な組織や団体に所属している。そして、そうした組織や団体もまた、ゴフマンが施設(institution)という用語を当てて記述しようとしたとおり(Goffman 1959=1974)、ある意味で人と同じように、固有の建物その他の物理的装備と固有名(およびひょっとしたら固有の集団の「性格」と固有の履歴とをそなえた、特定の「そのコンビニ」や「その警察」や「その会社」として私たちの生活世界の中に存在している。

つまり、パーソナルIDについて考えるときにも、社会的IDについて考えるときにも、参与者である私たちもそのやりとりの相手も、その場へは、固有名で名指されるような何者かとして立ち現れるのだということを忘れてはならない。しかも、そのやりとりにとってレリヴァントな(そのやりとりの組織化に直接関連する)カテゴリーやIDの属性だけでなく、それ以外のものも数多くくっついた「人」の総体として私たちは人前にいる(とりわけ対面的相互行為は、それを許す情報の多チャンネル性と利用可能な情報量の過剰なほどの豊かさをその特徴とする)。その総体性は、ある種のフォーマルなやりとりにおいては積極的に切りつめられることが望ましいとされるだろうが(たとえば窓口業務では、顧客の観察可能な諸属性のほとんどを無視して順番や必要な手順に焦点化した、「えこひいき」や「差別」がないやりとりが求められる)、いっぽう恋人関係や友人関係では、その総体性そのものが積極的な関心や探求の対象になるかもしれない(「きみのことをもっと知りたい、いや、きみのすべてが知りたいんだ!」)。

しかも、話をますます複雑にするのは、社会的IDの場合と同様に、パーソナルIDにおいても、一般的・抽象的なパースン、つまり「ふつうの人間」の概念が、ある特定の個人に一人前の人間としての資格を認めるに当たって一役買うということである。私たちがその中で暮らす

---

28) 身体的な見かけ(とりわけ顔と声)や固有名は、私たちが特定の個人を同定し、その人についてのさまざまな情報を収集して帰属的に集成させ、心像を構成する作業における、「アイデンティティの引っ掛け釘(identity peg)」の役目をはたす(Goffman 1963=2001)。比喩としては、引っ掛け釘というより、ぐるぐる回る砂糖の糸をからめて綿菓子を作るときにコアになる、あの真ん中の棒に喩えたほうがわかりやすいという気もする。

近代社会では、一般に、「個人<sup>パーソン</sup>」が社会の構成単位（in-dividual!）だと考えられており、そして国民国家は、その構成単位である個人を認定し、登録するシステムを持っている。私たちの一人一人を指す固有名自体がそのシステムの産出物であり、出生届と死亡届、住民登録、固有名詞が入ったさまざまな記録や証明書類の作成や発行が、私たちのひとりひとりの履歴のかなりの部分の「事実性」を担保する。

さらに、そうした「書類の上」の認定とは別のレベルの、個人＝「社会のメンバー」としての能力（competence）を身につけるという、第一次社会化といわれる過程の常識＝文化的な達成目標もある。戸籍や住民登録があっても、子どもや、認知症が進んだお年寄り、重い心の病や知的障害がある人は、生活のさまざまな局面で、十全な個人とみなされないことがある。さらにいえば、日常のやりとりの中で、ある人が、「ふつうの人」ならできること・知っていること・身につけていることを大幅に欠いていることが示されたとき（雑踏の中で飛び跳ねたりふらふらよちよち変な歩き方をしたりする、意味不明な大声を上げる、裸である、公共の場で用を足す等々）、それを行った者は、十全な個人としての能力を欠いているのではないかと疑われる<sup>29)</sup>。したがって、私たちは通常、自分は「変な人間ではない」ことを他者にちゃんと表示しようと意識して、あるいは無意識のうちに努めながら、日常生活を送っている。しかしながらももちろん、こうした「ふつうの人間」についての法的な、および常識的な基準や概念は（それを「一般的な人間役割」と呼ぶこともできるだろう）、歴史文化的な構成物、そういう言い方をすればなら集合表象なのである。冒頭で三種の社会学的な「わたし」論の伝統に触れたが、その二番目の「表象としてのわたし」論、具体的には、デュルケムの道徳的個人主義（人格崇拜論（Durkheim 1925=2010）からフーコーの「狂気」や「性」についての考究（Foucault 1972=1975；さらには、その衣鉢を継いで“ループ効果”で知られるハッキングの「多重人格」の概念史 Hacking 1995=1998）に至る流れは、まさにそうした一般的概念としてのパーソンの「歴史」を探索の対象にする。

私たちは「たったひとつの花」、つまり個別的な独自性（uniqueness）をそなえた存在としての個人であれという文化的メッセージにさらされ続けながら（そのメッセージは教育現場だけでなく、若者が作る若者向けの歌の中でも決まり文句に近いものになっている）、一方では、上述のように、つねに一般的な「人間の条件」をクリアしている（少なくとも踏み外していない）ことを他者に示すという配慮を求められる。これが、日常的相互行為という「わたし」劇場の舞台の基本設定なのである。固有の具体的な個人であること<sup>30)</sup>と一般的なパーソンとの関係が

29) そうした「ふつうさ」の歴史的な変遷については、たとえば、エリアス（Elias 1994=2010）や中野（2016）を参照のこと。

30) やりとりの相手にパーソンフードを与える（パーソンとして成り立たせる）効果的な手順に、あいさつや面子の保護作業など、初期ゴフマンが集中して考察した相互行為儀礼（その着想の一部は優先構造の分析として会話分析に受け継がれた）があるが（Goffman 1967=2012）、それを本稿の議論に盛りこむことは、紙幅の都合もありできなかった。

入り組んだものであることは、たとえば、戸籍や住民票のような公的記録や、社会調査ために集められた個人データについて考えてみてもわかる。そうした記録やデータは具体性を剥ぎ取られた表象であり、統計処理を通じてより徹底化した一般化の対象になる。しかし、その妥当性の根拠は固有名によって名指される具体的な個人の属性や活動なのであり、そうした根拠の確認が不十分であることが明らかにされたなら、そのケース情報はエラーデータ（より悪くすれば虚偽データや捏造データ）として扱われることになる。

## 6. スティグマのオムニレリヴァンス？

先に、スティグマ的カテゴリーは、社会的カテゴリーの一種だと述べたが、それだけであれば逸脱のラベリング論と変わるところはない。ところが、ゴフマンのスティグマについての議論は、もう少し複雑で精妙なものだ。彼の定義を見てみよう。

私たちの面前に顔見知りではない人がいるとき、その人にあてはまる人のカテゴリーを、<sup>パーソン</sup>他の人のそれと違った、そして他の人のものより望ましくないものにするある属性を、その人が持っているという証拠が現われるかもしれない。極端な場合、その人は、その証拠が示す属性によって、まったくもって悪い、危険な、もしくは劣弱な人間としてカテゴリー化されるかもしれない。それによって、その人は、私たちの心の中で、全体性をそなえた通常の間人から、汚染され価値を低められた人間へと地位を引き下げられる。そうした属性の、面目を失わせる (discrediting) 効果がきわめて広範囲にわたるものであるとき、それがスティグマである。それはときおり、欠点や短所やハンディキャップと呼ばれるだろう。それは、ヴァーチャルな [相互行為の場面にそのようなものとして立ち現れる] 社会的アイデンティティと事実的な社会的アイデンティティの特殊な乖離を形作る。[……] すべての望ましくない属性を問題にしているのではなく、あるタイプに属する個人はこのようにあるべきだという私たちのステレオタイプと不調和な属性だけを問題にしているのだという点にも注意してほしい。

したがって、スティグマという語は、底深い面目の失墜をもたらすような属性を指す。しかしながら、ほんとうに求められているのは、属性を語ることばではなく、関係を語ることばなのである。あるタイプの持ち主にスティグマ化をもたらす属性は、他のタイプの持ち主のふつうさ (usualness) を保証するものであり、したがってそれ自体は面目を高めもせず、失墜させもしないかもしれない。(Goffman 1959=2001: 15-16 ただし訳は中河による)

スティグマを逸脱的 (deviant) な社会的カテゴリーと等号で結び、いわゆるラベリング論の一種とみなすというのが、社会学と社会心理学において、広く見られた取り扱いだった。何ら



かの行ないをした、および／もしくは何らかの属性そなえているとみなされた個人に<sup>31)</sup>、他者、なかんずく専門家によって逸脱のラベルが貼り付けられ（それは「正解」であることもあれば「冤罪」であることもある）、それによって貼り付けられた人の社会的な存在様態が変更され、逸脱者（the deviant）として扱われることになる（そしてその扱いが、二次的逸脱、つまり「逸脱者」役割の取得をうながす）。しかしこうしたラベリング論の図式に回収してしまうなら、ゴフマンのスティグマについての議論は、大幅に切りつめられてしまうことになる。あるいは、スティグマを属性概念（特定のネガティブな評価を担うとされる社会的カテゴリーの適用がもたらす帰結の指摘）ではなく、関係概念としてとらえるべきだという正当な提案（たとえば、柄本 1990）も、その指摘だけにとどまるなら、ゴフマンの入り組んだ議論の結構をもれなく掬い取ることはできないだろう。

スティグマ的とされる社会的カテゴリーをめぐる事態のやっかいな（そして当事者にとって酷薄な）点は、当該のカテゴリーの担い手であると同定された（ときにはそう推測された）人は、他にも多くの社会的カテゴリーを含めたさまざまな属性をそなえているにもかかわらず、やりとり（や、その人が不在のときに思い描かれるイメージ）の中で、そのカテゴリーが代表的な、もしくはきわめて顕著なものとして浮かび上がり、他のカテゴリーや属性はディスカウントされたり背景化されたり無視されたりされたりするため、その全体性を切りつめられた存在として取り扱われやすい（上の引用の表現を借りるなら「全体性をそなえた通常の間人から、汚染され価値を低められた人間へと地位を引き下げられる」ということだとされる。このように指摘されてきたスティグマカテゴリーの支配的（overriding）な性格は、会話分析の分野でのジェンダーをめぐる論争の中で、性別カテゴリーのオムニレリヴァンス（omnirelevance）と呼ばれたもの（ex. Klein 2011）に似ているように見える。

オムニレリヴァンスとは、多種多様な相互行為の場面において、そのカテゴリー（上の論争の場合でいえば性別）がつねに、その場での活動の組織化と関わりを持つものとして参加者によって観察され参照されている（したがってそうした観察や参照が性別にもとづく差別的なやりとりの基盤になる）という想定である。ジェンダーだけでなく、人種や「障害があること」や「外国人であること（とりわけあまり好まれない国籍が出自の）」、受刑歴があること、性的志向が「ふつうでない」こと等々についても、そうしたオムニレリヴァンスがあるという「感じ」がしないだろうか。というかそもそも、性別カテゴリー（というか女性であること）もま

---

31) ただし、ラベリング論の創唱者たち（ベッカー、キツセ、エリクソン、およびその先達のレマート）のうち、キツセだけは、この図式の前提となる行いや属性や個人の「実体性」を「括弧に入れ」、レッテル貼り、つまりは「逸脱者」としてのカテゴリー化が達成されるにいたる社会的過程にのみ目を向けるという姿勢にこだわり続け、その延長線上に、社会問題への構築主義アプローチを提唱することになる。詳説する紙幅はないが、キツセのそのこだわり（当時同僚だったベッカーと論を交わして、その「原理的」な姿勢でベッカーをうんざりさせたという）とその帰結は、いまにして思えば、功罪相半ばするものだったような気がする。

た、スティグマ的カテゴリーのひとつだとはいえないだろうか<sup>32)</sup>。筆者の理解では、実際にさまざまな場面でのやりとりを経験的に調べる前に、のっけからそんな想定をするのは不適切だし、また、実際のところ、とりたてて性別がレリヴァントではない（その活動を組織化する参加者たちの言動に性別へのオリエンテーションが見てとれない）やりとりもいくらでもあるというのが、会話分析でのオムニレリヴァンス論への批判だった。これはもちろん、当を得た主張だと思う。

しかしながら、何らかの社会的カテゴリーがオムニレリヴァントであるという「感じ」そのものを、ただ錯誤として切って捨てるだけでよいのだろうか。たとえば、ここ数年の私の社会学の講義で、固有名で名指される個人IDと、役割と言い換え可能な多種多様な社会的IDについて説明したうえで、レポートやテストで受講者に個人IDについて語義説明してもらおうと、かなりの頻度で性別がその一部分として（性別役割の社会性についての私の繰り返しの講釈をそれこそ override するかたちで）答えの記述に含まれる。おそらく、多くの人にとって、性別は「某大学の学生」や「某社の社員」や「某学会の会員」などのような「単なる役割」ではなく、生まれてから死ぬまで変わらず「わたし」の一部をなし、その人となりの重要な一角を形作る何ものかなのである。この国ではそれが意識されることは比較的少ないが、たとえば米国では、人種やエスニシティ（およびそれと結びつけられた宗教的帰属）についても、同じようなことがいえるだろう。そして、ゴフマンがスティグマ的カテゴリーの三様態に含める身体的な障害や「前科」などについても、人によっては、同じような感じ方をするだろう。

ゴフマンによれば、スティグマ現象を特徴づけるのは、単なる逸脱的カテゴリーの付着ではなく、そうした「望ましくない」カテゴリーや属性と「あるべき」パースンの基準とのギャップがもたらすパーソナル・アイデンティティの「汚染」なのである。ここで、4節でみた役割—パースン複合体という発想に立ち戻ろう。特定の役割が前景化したやりとりにおいても、私たちはけっこうしばしば、その「背後にいる」パースンの諸属性を観察し、その場の活動や、それとは別の自分の余計な関心に関連する範囲で、やりとりの相手について知り、その人物像について簡易版のプロファイリングをしようとするだろう<sup>33)</sup>。やりとりが繰り返されてより「親しい間柄」になるほど、大概是「互酬性の規範」に沿いながら、パーソナルな情報が相互に開示され、知り合い同士はお互いにより多くの材料を使って相手の人物像を思い描くことができ

---

32) たしかに、それで本年（2021年）の早くに、五輪・パラリンピック組織委員会会長のポストを去ることになった森元首相の発言を引きあいに出すまでもなく、ある種の、とりわけ「男ばかり」の活動場面では、「女性であること」がゴフマンの記述に沿ったスティグマとして作動することはりうるし、そして歴史的過去においてはもっとひんぱんにあったに違いない。

33) お互いが知らない人への儀礼的無関心を示しあう公共の場においてさえ、私たちはしばしばひそかに、たまたまその場に居合わせる他者を観察し、かれらが「ふつうの見かけ」をしていて、自分にとって脅威をもたらさそうな人間ではないことを確認しようとする。そうした観察が行われていることは、たとえば泥酔した人や大声で不可解な言動をする人といった「ふつうではない人」への、周囲の人の回避行動からも明らかだ。

ようになる。パーソナルIDの「汚染」とは、そうして相手をパースンとして思い描くときに、スティグマ的なカテゴリーとその表示とみなされる諸属性が目立った (salient) ものとして浮かび上がって、それがパースンの全体像の構成に大きく影響を及ぼすという事態だというのが、私の理解である。

もちろん、そのようにして他者の人物像を思い描くという営為もまた「状況に埋めこまれて」おり、具体的な社会的場面の具体的な活動の中で、その都度的に行われるものである。先の引用文にいう、「汚染」創出の陰の主役である「あるタイプに属する個人はこのようにあるべきだ」という私たちのステレオタイプ」もまた、スティグマ的なカテゴリー同様、ある社会的場面においてはレリヴァントだが、別の社会的場面ではレリヴァントではないだろう。「ふつう」は状況依存のかつ社会的場面によって相対的であり、しかもそれを属性的に明確に記述することは困難だ（「ふつうとは『ふつうでないこと』でないことだとうそぶいて、それでお茶を濁したくなるくらいに<sup>34)</sup>。とはいえ、この「ステレオタイプ」はおそらく、ある種の場合（たとえば「精神疾患」や「痴呆」や「障害」が顕著な属性として取り扱われる場合）には、5節でみた「一般的なパースン」の基準の系譜と何らかのかたちでリンクするものであるはずだ。

「オムニレリヴァンスが感じられること」の説明にあたっては、本人の心理（たとえば『ステイグマ』でいうところの自我アイデンティティに強く組みこまれていること）の現われに注目するより、やりとりの場の特徴に目を向けるのが、社会学にとっての本筋だろう。そこで一番に取り上げたいのが、スティグマ的なカテゴリーやその“しるし (sign)”となる属性の、個々の相互行為場面での可視性 (visibility) の問題である。

さて、スティグマ的なカテゴリーと属性に「オムニレリヴァンスが感じられること」とすれば、それは、そうしたカテゴリーや属性が、その担い手が参与者となる多種多様な場面において参照可能になるという出現のひんぱんさのせいだろう。そうしたひんぱんさの理由の一つとして重要だと思われるのは、それらの可視性 (visibility) である<sup>35)</sup>。対面的な相互行為場面では、たとえば肌の色や容貌や瞳の色や体型やしわ・しみやタトゥー・ピアスやしゃべり方（たとえば訛りや吃音）、匂い、あるいは松葉杖や車椅子、サングラスのような装備は容易に観察可能であり、したがって、きわめて多くの社会的場面で、その属性がそこで行われている活動と直接関係ない場合にも、その人のスティグマについて情報提供をしてしまう<sup>36)</sup>。人の社会的活

34) ゴフマンには公共の場での「ふつうの見かけ」についての興味深い論考があるが (Goffman 1971)、まだ、本稿に組みこめるほどには消化できていない。

35) 「障害」のノーマリゼーションには、この可視性をやりとりの場面において小さくする工夫を含めるべきだという主張を、15年近く前の学会報告でしたことがある (中河 2006)。そのときはほとんど何の手ごたえもなかったが、TV番組『バリバラ』などを観ていても、いまでは、そうしたかたちで語られることはなくても、そうした配慮（あるいはむしろそれを逆転してショーアップすることをも含む）はしだいに広がってきているように思われる。ちなみに、それとは逆の、見えないものを可視的にする工夫のひとつが、ナチスが強制した悪名高い黄色いダビデの星の縫い取りである。

36) もちろん、やりとりの場面で「それ」が見えなくても（もともと外見からは発見できないスティグマ

動はほとんどつねに、特定の役割のペアやセットを軸にして組織化されながらも同時に、「その背後」のパーソンへの配慮の表示を伴うものでもあるから（あいさつや、待遇表現、礼儀、失礼への修復儀礼等々、ゴフマンはそうしたパーソンフッドをめぐる相互行為儀礼が円滑に進んで参加者がお互いをパーソンとして認めあうことが、役割を介した用具的な課題遂行の前提条件だと考えていた）、スティグマ的な属性の存在がそれと知られることは、やりとりの相手にも本人にも、程度の差こそあれとまどいや当惑をもたらしかねない<sup>37)</sup>。こうした微細な読みとり経験および読みとられ経験の繰り返しが、「オムニレリヴァンス感」の基盤になるとはいえないだろうか。

こうしてスティグマ的なカテゴリーや属性が発見可能だということは、とりもなおさず、それは単なる偏ったもの<sup>ステレオタイプ</sup>の見方や概念の産物ではなく、一定の事実性に裏付けられているということである<sup>38)</sup>。事実とは、とりあえず、社会的に妥当とされている方法を通じて、それが「ある」こと、およびその「ある」ものの諸特徴がどのようなものであるかを発見したり観察したりすることができるような事柄だと考えておくことにしよう。ゴフマンは、事実的なアイデンティティと、やりとりの場に投影（project）されたアイデンティティとのそれ自体はしばしば見られるギャップが、スティグマの場合とりたてて顕著なものになることが少なくないという。そうした社会的事実（デュルケム）に根差したギャップが、隠すことと開示すること、パッシングやカヴァーリングや秘密や強請やクローゼット仲間の形成やカムアウトといったスティグマをめぐる情報ゲームの舞台を設定する<sup>39)</sup>。

最後に一言，“stigma of character traits”，“physical stigma”，“stigma of group identity”という三種の「信頼を失わせうる属性」を包括するものとして提示された、ゴフマンのスティグマ概念の「うさん臭さ」について述べておきたい。いうまでもなく、あまりにも多種多様な事象に当てはまる議論として提示されているため、一つ概念を使って過剰な一般化が行われてい

---

属性もたくさんあるし、見えるものであっても上手なカヴァーがほどこされていることもある）、「それ」がそこにあることを自分は知っており、しょっちゅう意識している、もしくは五感で感じているという本人の経験ももちろん重要だが、この報告ではそうした側面にまで手を広げる余裕はない（『スティグマ』ではそうした意識や経験がやりとりや関係にもたらす影響にも目を向けている）。

37) これは、スティグマ化された人とは、フォーマルな役割や市場経済的役割を介したやりとりはしても、より「パーソナル」な付き合いは回避するという行動パタンの入り口になるかもしれない。

38) ゴフマンはどのようなことを事実と考えていたかについては、中河（2019a）で試行的に整理してみた。

39) ただし、スティグマの場面による相対性とか、だれもが「叩けばほこりの出る体」だ（ちょっとしたスティグマ的なものを持ちあわせているだろう）という以前に、そもそも私たちは、裸体や排泄（物）や性行為、不適切な習慣や欲求や衝動や内心の動き等々のさまざまなものを、歴史文化的な沈殿（バーガー＝ルックマン）の結果形成された社会的基準に沿って隠蔽することを通じて、「パーソンであること」を成立させている。しかも、私たちの社会のある者は、おそらくはそうした隠蔽の制度的メカニズム自体に反動形成的にそそのかされて、その向こう側の「ほんとうのこと」をのぞき見たいという欲望を育み、そしてときおりそれを実行に移す。したがって、そうした意味では、現代の私たち（ゴフマンがいうところの「常人」）は、「スティグマを隠す人」と同じように、いつ面目を失う立場に立たされるかわからないということもできる。

るというそしりを免れがたい。この本を、ユダヤ人移民二世としてのゴフマンの自伝的要素が反映された著作とする薄井（2019）の指摘は、『スティグマ』の細部の記述の生き生きした説得力の一部を説明し、また、そこでの議論についての別の読み方の可能性を示唆するだろう。とはいえ、本書より後の研究者は、スティグマ一般ではなく、具体的な歴史社会的な文脈や状況の中での、個別特定の疾病や障害や人種やエスニシティや性的志向や法執行の対象者等々の個々のカテゴリーをめぐる現象に照準して、より限定されたかたちで探求を進めるのでなければ、得るところは少ないだろう。スティグマは、同書で提示された他のいくつかのタームと並んで、一種の感受概念（sensitizing concept; Blumer 1954）、つまりは、その出来がよければ（かなりよい気がする）後進の調査研究に種々のヒントを与える発見的な概念なのだと思う<sup>40）</sup>。

## 7. 結語

冒頭の節で述べたように、ゴフマンの遺産とエスノメソドロロジーの洞察を基盤に、従来の（構造機能主義とその仮想敵だったマルクス主義の）社会学の方法論上の陥穽や不具合を踏襲しない、現代版のデュルケミアンの社会学を目指すというのが、アン・ロールズに触発された筆者の、ここ数十年の展望（もしくは希望）だった。それ以前の時期にコミットしてきた社会問題の構築主義アプローチ（Spector and Kitsuse 1977=1990; 中河 1999b）が、ポスト構造主義やポストモダンといった不毛な思潮に振り回された構築主義論争（Holstein and Miller 1993）を経て四分五裂し、自らのポテンシャルを見失ってしまった中で、それが筆者にとって、志を守りつつ進むのにもっとも適した way out の方向と思われたのだ。そうした言語論的（より正確には語用論的）転回以降の社会学の“新しいやり方”のパラダイム<sup>41）</sup>を整備できれば、それは「内側からの組織化」という社会秩序観に根差すものであるため、ルーマンのシステム理論や、フーコー＝ハッキングの知の歴史の系譜学的探求と親和性に富み、そして、主体／構造、主観／客観、ミクロ／マクロ、実在／表象（もしくはイデオロギー）といった古色蒼然たる二分法を使って産出され続ける不毛な論争群ともきっぱり袂を分かつことができるはずだった<sup>42）</sup>。

もちろん、そうした範例の転換は、ひとりやふたりの方法論者の手ではできないものではない。

40) 言い換えれば、何らかの経験的事象にスティグマということばを形容としてくっつけても、それだけでは、その何かについてのさほど有益な記述や説明にはならないだろう。余談だが、ゴフマン自身は、それほど高く評価していなかったふしがあるブルマーが唱えた感受概念ではなく、お気に入りだったケネス・バークの「不一致がもたらす新たな視点（perspective by incongruity; Burke 1935）」を持ち出して、自己弁護をしただろうという気もする。

41) それに沿った経験的探求の最近の例として、ロールズ自身のレイシズム研究を挙げておく（Rawls and Duck 2020）。

42) ウィトゲンシュタイン系の言語ゲーム一元論（黒崎 1997）や、ハッキングの動的唯名論（dynamic nominalism ⇔ ループ効果）もしくは歴史的存在論（historical ontology; Hacking 2002）の知恵に学ぶことが、そうした道行きに役立つと筆者は考える。

本稿では、そうした転換作業のビルディングブロックのひとつになるはずの、ゴフマンの自己論の検討と、その延長線上に見える「わたし」現象のある部分とそれをめぐる論理文法について、できるところまで考えてみた。ゴフマンの自己論から多くを学ぼうとすれば、おそらく、『行為と演技』と『スティグマ』、『相互行為儀礼』の論点や微妙に異なる用語を突きあわせて統一的に理解し、さらにそれを『フレーム分析』での議論と対応させるという手順が必要になる。その意味では、本稿で筆者がとぼとぼとどり着いた地点は、日暮れて道遠しどころか、夜更けに道につくばうという形容が相当だろう<sup>43)</sup>。

最後に、「わたし」現象をめぐる重要な論題でありながら、本稿に盛りこめなかったものを三つだけ挙げて、結びの代わりにしたい。その第一は、自己の多層性についてである。ゴフマンが『フレーム分析』(Goffman 1986 (1974))でいう転調(中河 2015に簡易な説明がある)、つまり“リアリティ”の多層化は、人びとの活動だけでなく、それにたずさわる人の自己をも多層化させる。このことの意味については以前、「女が男歌を歌い、男が女歌を歌う」CGP (cross-gendered performance) についての論考で少し考えてみたが((A) 固有名で名指されるその人 — (B) 芸名で名指されるその人 — (C) 人称で語る歌の主人公という、パフォーマンスをする歌手の「自己」の三層構造; 中河 1999a)、そうした現象の社会学的探求にとっての重要性をもっと体系立てて示しておきたかった。とくに、フレームの切り替えとそれに伴う自己の切り替えや、フレームのリム(縁)の表示とそれへの言及(一昔まえに流行った例の自己言及性の話)、フレームのリム領域へそしてコア(核心)領域へという志向の往還等、私たちが日常的に行っているフレームの使いこなしをめぐる事象については、まだほとんど論じられていない。また、同書でいうフレームの偽造という発想を使って、社会的IDとパーソナルIDの擬装や捏造についても、経験的探求に使えるような道具立ての整理をしたかった。

その第二は、自己と感情についてである。ダーウィンとホックシールドの知見にゴフマンや会話分析/概念分析の知見を加える方向で、以前書いた感情の社会学への構築主義の立場からの主張(中河 1999b所収)をバージョンアップしておきたかった。そのうちの「笑い」に関する部分については試論を発表したが(中河 2016)、感情の表出が、特定の状況内での特定のタイプの自己(人のカテゴリー)の「述部」として、やり取りの中で大きな役割を担うという点については、さらに掘り下げた考察が必要だろう。

最後に、対象化(objectification)と同一化(identification)についてである。上の笑いについての論考を書く中で、対象化(他者を自分の外にある対象として位置づけ自分から切り離すこと)と同一化(相手の身になる、つまり相手の視点をシミュレーションすること)という対人的な二つの志向が、他者やその行い・属性を「笑ってよいand/or笑うべきもの」と位置づけて笑うことができるかどうかの分岐点になることに気づいた。さらにいえば、人は自己対象化を

43) なお、正確に言えば、これでまったくの幕が下りるということではなく、期せずして、ゴフマンの生誕百周年である来年に、『行為と演技』の“日本語として読める”改訳を刊行する予定になっていて、それが筆者のこの分野での「最後のご奉公」ということになる。

行うことによって自らを笑うことができるし、そうした自虐の笑いは、差別や抑圧の局面だけでなく、自己救済やセラピーをめぐるでも大きな役割を果たす（同一化の回路の遮断もしくは欠落によって、相手を笑いや崇拜や蔑視や憎悪や恐怖や道具の利用の対象にできるだけでなく、先にも注で触れたように、殺すことさえ容易になる；美達 2011）。同一化はおそらく比較的斉一的だが、対象化には多くの種類のものがあり、そして、恋愛や性交渉の体験を反省的に思い浮かべてみればわかるように、私たちはしばしば日常のさまざまないとなみの中で、この二つの志向の往還（行ったり来たり）を経験する。対象化と同一化は、日常の相互行為のダイナミズムの微細な部分を読み解く鍵になりうるだろう。さらにいえば、小説、演劇、映画、マンガ、ゲーム等々のフィクショナルな構成物を私たちが「ふつうに」鑑賞できるのにも、同一化と対象化が与って大きな力がある（たとえば物語の「主人公」という制度的慣行は、ある程度の同一化が作動しないと成り立たない）。このように含みの大きい概念的資産に、キャリアの最後のフェイズで行き当たったのは残念といえば残念だが、これもまた定めというものなのだろう。

#### 参考文献一覧

- 芦川晋「『自己』の『社会的構築』—昔から社会学者は『自己の構成』について語り続けているが一体どこが変わったのか？」『社会学評論』68, 1: 102-117.
- Blumer, Herbert, 1954, "What is Wrong with Social Theory." *American Sociological Review* 18: 3-10.
- Burke, Kenneth, 1935, *Permanence and Change: An Anatomy of Purpose*, Berkeley: University of California Press.
- Daston, Lorraine J., and Peter Galison, 2007, *Objectivity*, Princeton, NJ: Zone Books (瀬戸口明久他訳『客観性』名古屋大学出版会 2021).
- Douglas, Mary, 1970, *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*, London: Barrie & Rockliff, Cresset Press (江河徹訳『象徴としての身体—コスモロジーの探究』紀伊國屋書店 1983).
- Durkheim, Émile, 1925, *L'éducation morale*, Paris: Presses Universitaires de France (麻生誠・山村健訳『道徳教育論』講談社 2010).
- 柄本三代子 1992「『常人—スティグマ保有者統一概念』, その示唆するところ—Goffmanの『構造』の展開可能性—」, 『ソシオロギス』16:87-100.
- Elias, Norbert, 1994, *The Civilizing Process*, Oxford: Blackwell (赤井慧爾他訳『文明化の過程—ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷(改装版)(上)(下)』法政大学出版局 2010).
- Erikson, Erik H., 1959, *Identity and the Life Cycle: Selected Papers*, Madison, CT: International Universities Press (小此木啓吾訳『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル(新装版)』誠信書房 1973).
- Festinger, 1954, *A Theory of Cognitive Dissonance*, Stanford, CA: Stanford University Press (末永俊郎監訳『認知的不協和の理論—社会心理学序説』誠信書房 1965).
- Foucault, Michel, 1972, *Histoire de la folie à l'âge Classique*, Paris: Gallimard (田村淑訳『狂気の歴史—古典主義時代における』新潮社 1975).
- Francis, David and Stephen Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Social Interaction*, London: Sage (中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳『エスノメソドロロジーへの招待—言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版 2014).
- 船津衛 2005「認識する私」井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣.
- Garfinkel, Harold, 1973, *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliff, NJ: Prentice-Hall.
- Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity (門田健一訳『社会の構成』勁草書房 2015).

- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday (石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房 1974).
- 1961, "Role Distance," in *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, New York: Bobbs-Merrill, pp. 83-152 (「役割距離」佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学』誠信書房 1974 83-172頁).
- 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliff, NJ: Prentice-Hall in 1963 (石黒毅訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ (改訂版)』せりか書房 2001).
- 1967, *Interaction Ritual: Essays in Face-to-Face Behavior*, Chicago: Aldine (浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学〈新装版〉』法政大学出版局 2012).
- 1971, "Normal Appearances," in *Relations in Public*, NY: Harper & Row.
- 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, NY: Harper & Row.
- Grossman, Dave, 1995, *On Killing: The Psychological Cost of Learning to Kill in War and Society*, Boston: Little, Brown and Company (安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』筑摩書房 2004).
- Hacking, Ian, 1995, *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton, NJ: Princeton University Press (北沢格訳『記憶を書きかえる—多重人格と心のメカニズム』早川書房 1998).
- 2002, *Historical Ontology*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Holstein James A., and Gale Miller (eds.), 1993, *Reconsidering Social Constructionism*, New York, Aldine de Gruyter.
- Holstein, James A., and Jaber F. Gubrium, 1999, *The Self We Live by: Narrative Identity in a Postmodern World*, New York: Oxford University Press.
- Klein, Noa Logan, 2011, "Doing Gender Categorization: Non-Recognitional Person Reference and the Omnirelevance of Gender," in Susan A. Speer and Elizabeth Stokoe (eds.), *Conversation and Gender*, New York: Cambridge University Press.
- 黒崎宏 1997『言語ゲーム—元論—後期ワイトゲンシュタインの帰結』勁草書房.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編 2007『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社.
- 美達大和 2011『人を殺すとはどういうことか—長期LB級刑務所・殺人犯の告白』新潮社.
- 中河伸俊 1999a「転身歌唱の近代—流行歌のクロス=ジェンダー・パフォーマンスを考える」北川純子編『鳴り響く性—日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房 237-270頁.
- 1999b『社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
- 2004「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』219号 pp.244-259.
- 2005『『どのように』と『なに』の往還—エンピリカルな構築主義への招待』盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編『<社会>への知/現代社会学の理論と方法 (下)—経験知の現在』勁草書房 pp.165-189.
- 2005「逸脱のカテゴリー化とコントロール」宝月誠, 進藤雄三編『社会的コントロールの現在』世界思想社 pp.159-173.
- 2006「相互行為現象としてのスティグマ」日本社会病理学会第22回大会 (於京都府立大学) 自由報告.
- 2010『『自己』への相互行為論アプローチ: 経験的探究に有効な再定式化のために』『人文学論集』28号, pp.45-71.
- 2015「フレーム分析はどこまで実用的か」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとりの秩序の社会学』130-147頁.
- 2016「談話標識としての笑いと『お笑い』—フレーム分析実用のための試行的検討—」『同志社社会学研究』20号 pp.1-17.
- 2017「役割アイデンティティとパーソンフッドの達成—ゴフマンに拠って“自己の構築”アプローチを再構成する—」(日本社会学会第90回大会 テーマセッション19「方法としての構築主義の遺産を査定する」第5報告).



- 2019a「フレーム分析の実用可能性 — fabricationとうそをめぐる試考」(東北社会学会研究例会 (E. ゴッフマン研究の射程) 第2報告).
- 2019b「デュルケム・ゴッフマン・ガーフィンケル — 学史の“バミューダトライアングル”を探訪 (い) く (遭難しないのか?)」(日本社会学史学会・2019年度秋の関西研究例会).
- 2021「パーソナルアイデンティティとステイグマ — 自己論とカテゴリー化論の宿題」(2021年3月2日13:00から有志の会主催で、富山市総曲輪・喜代多旅館より zoom 配信された)
- Parsons, Talcott, 1964, *Social Structure and Personality*, Glencoe, IL: Free Press of Glencoe (武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社 1973).
- Rawls, Anne Warfield, 1984, “Interaction as a Resource for Epistemological Critique: A Comparison of Goffman and Sartre”, *Sociological Theory*, 2: 222-252.
- 2003, “Orders of Interaction and Intelligibility: Intersections between Goffman and Garfinkel by Way of Durkheim,” in A. Javier Treviño (ed.), *Goffman’s Legacy*, Oxford: Rowman & Littlefield, 2003. pp.216-253.
- 2004, *Epistemology and Practice: Durkheim’s The Elementary Forms of Religious Life*, New York: Cambridge University Press.
- Rawls, Anne Warfield, and Waverly Duck, 2020, *Tacit Racism*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Sacks, Harvey, 1974, “On the Analyzability of Stories by Children”, in Ralph H. Turner (ed.), *Ethnomethodology*, Harmondsworth: Penguin, pp. 216-232.
- 酒井潔 2005『自我の哲学史』講談社.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編 2009『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版.
- Spector, Malcolm, and John I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings (村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』マルジュ社 1990).
- Spickard, James V., 1989, “A Guide to Mary Douglas’s Three Versions of Grid/Group Theory,” *Sociological Analysis*, 50, 2: 151-170.
- Strauss, Anselm L., 1959, *Mirrors & Masks: The Search for Identity*, The Free Press (片桐正隆監訳『鏡と仮面 — アイデンティティの社会心理学』世界思想社 2001).
- 薄井明 2013「ゴッフマンの『隠れジンメリアン』疑惑 — 従来のゴッフマン理解の見直し」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』20: 7-20.
- 2019「ユダヤ人移民二世アーヴィング・ゴッフマンと彼の著書『ステイグマ』: 二十世紀の北米ユダヤ人の社会的地位の変化がゴッフマン社会学に与えた影響」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』26: 1-16.
- 渡邊芳之 2010『性格とは何だったか』新曜社.
- Winch, Peter, 1958, *The Idea of Social Science and Its Relation to Philosophy*, London: Routledge & Kegan Paul (森川真規男訳『社会科学の理念 — ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究』新曜社 1977).